

年の初めの・・・

「あけましておめでとうございます」。新たな一年が始まったとき、まず私達が口にするのが、この一言です。この言葉は、宮中の年賀・朝賀の儀式が発祥といわれています。また、年が明け歳神様を迎える際の祝福の言葉ともいわれています。さらに古代人にとって夜の暗闇が終わり、新しい朝に太陽が昇ることに新しい生命の息吹を感じたのかもしれない。現代人の風習からは消えつつありますが、朝日に向かって手を合わせる行為は、縄文時代頃からの自然崇拜の名残とも言われています。

初詣に行くと「お屠蘇」が振る舞われていることがあります。本来、この屠蘇は単なる酒ではなく、「屠蘇散」と呼ばれる漢方薬のようなものを酒または味醂に浸して作ったものです。屠蘇散の処方は、書物によってことなりますが、一般的にはオケラの根（白朮）・サンシヨウの実（蜀椒）・ボウフウの根（防風）・キキヨウの根（桔梗）・ニツケイの樹皮（桂皮）・ミカンの皮（陳皮）など身体を温め胃腸の働きを助け、風邪の予防に効果的といわれる生薬を含んでいます。もともと、薬のトリカブトの根（烏頭）や下剤のダイオウ（大黃）なども加えていたようですが、現在の処方には激しい作用の生薬は含まれていません。日本では平安時代から処方されていたよ

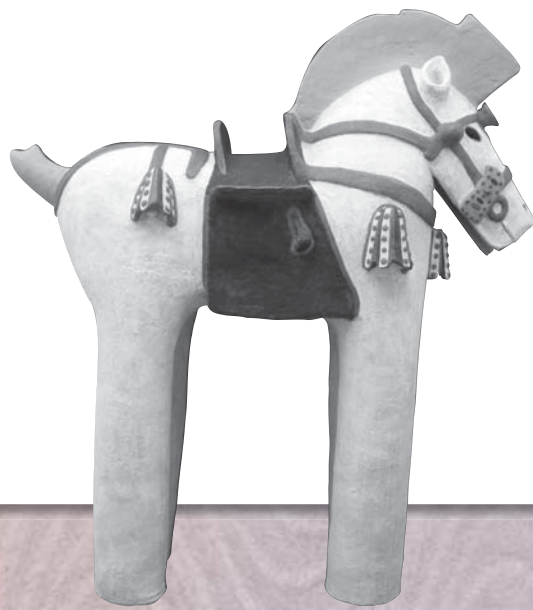
うで、土佐日記（紀貫之）にも屠蘇散がでてきます。そもそも「屠蘇」という言葉には「蘇」という悪鬼を屠るという意味や悪鬼を屠り、魂を蘇生させるという意味があつたようです。「一人これを呑めば一家病なく、一家これを呑めば一里（一つの村）病なし」といわれるほど一年の邪気を祓うとされています。

お屠蘇をたつぷりと召し上がり、そのまま眠ってしまうと初夢となるのでしょうか？初夢は元日の朝、あるいは二日の朝に憶えている夢と諸説があります。昔から夢は神仏からのお告げとされており、初夢が一年の運を占うとされています。ですから昔からいい夢を見ようといろいろなまじないがあつたようです。「一富士・二鷹・三茄子」（これには四・五・六の続きがあります）や七福神の乗った宝船などがあります。

「二富士」は江戸時代以降の風習で、幕府を開いた徳川家や家臣などのゆかりのある駿河の国（静岡県）に関連する内容ともいわれます。宝船に関してはこの絵を枕の下に入れて寝るといいとされます。ここまでは、多くの方がご存知のことと思います。が、実はこれ以外に吉夢を招く呪文があることをご存知でしょうか？その呪文は、「長き夜の遠の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな」。これをひらがなに直すと「な

かきよのとをのねぶりのみなめざめなみのりぶねのおとのよきかな」となります。お気づきでしょうか？この文章は回文といい、上から読んでも下から読んでも同じ文章となります。最初と最後の仮名「な」を重ねて円にした場合、どこから読み始めても同じとなり、終わりがありません。こういった終わりのない永遠に繰り返すようなものの中には、魔物や鬼は侵入できないとされています。一筆書きされる星「☆」や籠の網目いわゆるカゴメもそうです。

このほか、平安時代頃から朝廷の年中行事に「白馬の節会」というものがあります。正月の七日に天皇が紫宸殿（御所の正殿）において、二十一頭の「白馬」をご覧になった行事で、この日、白馬を見ると一年中邪気を除くとされました。ぜひ、一月七日に「道の駅しもつけ」に展示されている甲塚古墳出土の白色馬形埴輪のレプリカ（本物は国分寺庁舎ロビーに展示）をご覧ください。いただき良い一年をお過ごしください。



下野市教育委員会 文化課